

(平成二〇年度)がひときわ印象に残っている。

歴史講座では、「太平洋戦争下の尼崎のくらし」(尼崎郷土史研究会、平成二六年度)、「伝えてゆきたい 尼崎の記憶」(尼崎市女性センター、令和二年)など、八〇を過ぎても郷土史研究会や市民団体からの講演依頼を引き受けおられた。

郷土史研究会の大先輩のお二人を失ったことは、私達にとつて、大変な痛手であり悲しみではありますが、お二人のこれまでの御業績を偲び、かつ御指導に感謝申し上げます。「思い出」を書かせていただきました。

## 古文書講師の公手さん 郷土史編集者の羽間さん

宮崎 恭子  
(みやざききょうこ)  
(尼崎郷土史研究会会員)

### 公手さん

公手博さんに最初に会ったのは、尼崎郷土史研究会(以降、郷土史会とする)が主催している古文書講座の上級クラスであった。その時の講師は故奥本馨先生で、授業の進め方は、授業がはじまる前、割り当てのところを受講生が板書し、その板書に対して講師が解説するというもの。教材は「宝永春秋記」であった。この文書は、狂歌、川柳などが含まれ、能などを下敷きにその時の権力に対する批判や揶揄を込めて詠まれたものでとても面白く感じ、「すごい教材」と思ったのを記憶している。ただ、字体はもう崩れ、ミミズが這っているような、何が書いてあるのかわからない。その時、古文書の勉強を始めて何年目位であったろうか。難しかった。

板書に当たりその虫食いのように分からないところを授業の前に教えてもらった。その教えてもらった先輩の一人が、公手博さんだった。暫くして、こんどは、地域研究史料館で開かれている「尼崎の近世古文書を楽しむ会」(以降、楽しむ会)に、山村さんという方と共に誘っていただいて、以来、「楽しむ会」では一貫して公手さ

んの左隣に座り、古文書を読むこととなった。

公手さんは、その後、郷土史会で幹事をされ、長年郷土史会で古文書講師をされていた故伊藤保<sup>たち</sup>先生から推薦され、古文書の講師をされることとなる。また、郷土史会の会誌『みちしるべ』に戦争体験を執筆、郷土史会の歴史講座でも戦争体験をご講演された。その戦争体験とは、どのようなものか。これはやはり公手さんを語るにとっても外せるものではないと思う。それはシベリア抑留というものである。公手さんは、神戸の中学卒業後、村松陸軍少年通信兵学校に入学する。『みちしるべ』第三九号「シベリア抑留記」の中で

陸軍教育總監のもとに設けられた、高度な通信技術を身につけた兵科下士官を養成する機関で、応募資格は15歳〜17歳、年1回入学、修学期間は2年である。

とある。そして、昭和二〇年三月五日に卒業。

3日間の卒業休暇を終えて、皆それぞれの任地へと別れ、赴任した。私は関東軍要員として、軍用列車で、途中名古屋あたりと思うが、東京11期生と共

に、新京の関東軍司令部に、3月下旬到着した。

私は、即日、軍司令部の命令により、関東軍通信教育隊（第五四九部隊）に配属され、奉天郊外の北陵にある部隊に赴任した。

という。そして、その地で敗戦を迎え、それより抑留生活が始まる。ここでは、シベリア抑留時の公手さんの生活というものがどのようなものであったかを記述することはしないが、今を生きる我々には想像すらできないものであるのは確かである。そのような経験の中で、ドイツ人の捕虜の一人から歯科衛生士としての技術を学び、それが、日本に復帰してからの仕事になった。

その後、七四歳のとき古文書に魅せられた公手さんは、昨年（令和二年）十一月に亡くなられるまで、ずっと古文書を学び（学習の場は八尾市にも及んでいる）、古文書講師としてありつづけておられたようである（平成二九年講師を退任されたが、亡くなる直前まで、「わしは古文書の講師をしてるんや」と言われていたという）。それが、自慢でもあり、古文書が生活する上で大部分を占めていたのかと思う。

公手さんは近世末期の尼崎南部の中在家町なかざいけ（現西本町）の町家の復元地図（尼崎市立地域研究史料館所蔵「梶広子氏文書」中の「中在家町絵図」を翻刻し地図に描きおこしたものの）の作成や尼崎藩第六代藩主松平忠栄公ただながの生母お寿女すめを妹に持つ澤田佐平太の文書（澤田兼一氏文書）・幕末期の服部文書の解説では存分に力を発揮した。古文書の解読のスピードは、他に追隨をゆるさない、楷書体を読むが如くのスピードであった。辞書（古文書には解読字典というものがある）は、いつバラバラになってもおかしくないほど使い込まれ、聞いたところによると、解読できない文字があると気になって、気になって、寝ても覚めても考えているとか。私も分からない字があり、教えてもらおうと聞くと、その時は分からないように見えたが、翌日電話で「あの字はなあ、〇〇というんや」と教えていただいたことがある。郷土史会の古文書講座では一〇人以上の生徒さんを抱え、その面倒見の良さと、明るさ、気さくさ、そして、話上手に教え上手という三拍子揃ったものがあつた。教材とした古文書の量も半端ではなかつた。

「楽しむ会」での公手さんは、服部文書の解読を手掛けるコースに在籍し、その場では、順番に概ね一人半頁ずつ読んでいくのであるが、その会の終了後、翻刻を自宅のパソコンで、CDに落とすという作業をされていた。その作業をずっと一〇年以上されていたのではなからうか。服部文書は知る人ぞ知る難解な文書である。それを、お年の事を言っではいけないが、自分の親と同年の公手さんがその作業をされていたのである。もう頭が下がるだけである。古文書の収集もされ、私も見せていただく機会があつた。最晩年は、体調をくずされることも多く、「楽しむ会」も休みがちであつた。コロナ下ということもあつて、お見舞いにもろくに行けなかつたのが、悔やまれる。

羽間美智子はまさん

羽間美智子さんとの一番の思い出は、郷土史会の会誌『みちしるべ』五〇周年記念号の編集作業を一緒にした時から現在にいたるまで、毎年発行されるその編集作業を共にさせていただいたことである。郷土史会でのことや、いろいろなお話をしながら作業をした。「石造物

の調査を田岡先生と共にした」とか。田岡先生は確か、『尼崎市史』の第一〇巻掲載の石造物の調査をされた方である。また、「夏の暑い日に西本（珠夫）先生が市内で調査をするのにつき合った」（この時は墓碑銘を調べていたそうである）などだ。西本先生は郷土史会の会長であつた方で、いいコンビのように感じたものである。

郷土史会の事業にはその他、歴史講演会と歴史散歩とがあるが、羽間さんはその講師として講演・案内され、その際に色々な資料を作成・提供されている。平成二四年の歴史散歩「尼崎中西部石造物を訪ねる」の際の資料は、五輪塔、板碑、宝篋印塔、層塔、無縫塔などの説明に始まり、仏様の種類、天・明王・羅漢などの説明、禅定印、種子、曼荼羅の説明、そして、一月予定のバスツアーの行先である滋賀県蒲生郡石塔寺の宝塔と石造五輪塔の解説が手書きで丁寧に書かれているものだった。平成二三年の歴史散歩「大物周辺を歩く」では、ご自身で撮られた写真と共に、大物周辺の解説。また、『尼崎の文学碑を尋ねて』（尼崎郷土史研究会、平成三〇年）の元になった原稿は二回開かれた歴史講演会での資料であ

る。

そして、平成三年当時尼崎市立北図書館に勤務されていた羽間さんがまとめられた『尼崎の伝説』（尼崎市立北図書館、平成三年）を土台にした『みちしるべ』第三号・三四号「尼崎の伝説特集号」は読み応えのある内容である。これらの資料は、私にとって、かけがえのないもので、一〇年以上たった今も読みかえし、見返し、活用している。

その他、多種多様な分野に造詣が深く、お宅には市史をはじめとして、郷土の歴史に関する資料が無数にあつた。話の中で、「一寸取つてきます」と、急な階段を登られていた姿が今も目に浮かぶ。私が以前郷土史会会計の仕事をして頂いていたときは、副会長として、そして、会長として色々な相談にのつていただいた。先の公手さんのお病気がわかった時には、同じく古文書講師の石井進先生とお宅まで足を運んでくださった。昨年、郷土史会六〇周年事業の一環として、『尼崎の文学碑を尋ねて』の増補改訂版の話が上つた際に、書き足りなかつた部分をぜひ加えていただきたいと、個人的にもお願い

し、また、ライフワークとして、『みちしるべ』に九度  
にわたって執筆されていた「第二次大戦下の尼崎のくら  
し」の次のお話を読みたいともお願いしていた。

今年、二月四日の郷土史会役員会を欠席しますとのお  
電話があり、五日に役員会のご報告をお電話した際  
に入院のことを伺った。その時まで、『みちしるべ』第  
四九号のことをされていた様子で、『みちしるべ』原  
稿に関する資料の入った会員宛の封筒と私宛の封筒があ  
るとお電話で伺った。直にいただきに上がったが、同時  
に、「このようなものがあるんです」と四枚の四〇〇字詰  
め原稿用紙をご家族の方よりいただいた。その時、私に  
は、羽間さんにあれやこれやと原稿を頼んでいたので、  
申しわけない気持ちと、「今年度の『みちしるべ』の編  
集はどうしたらええんやろ」という想いと、なにか焦り  
に似たものがあつたように思う。次の日の夜、お亡くな  
りになられ、現在も信じられない気持ちのほうが大きい  
が、少し落ち着いてきて、四月、『みちしるべ』第四九  
号を配布することができた。

編集作業が佳境になると、羽間さんの家にお邪魔し、

ここはどうしようとか、ここはこの文章のほうか、と  
か、相談していたことが思い出される。「ここは、書い  
ておられる方が記憶違いされていますね」とか、「この  
文章は、あの本に書かれています」「そのことについて  
は、中之島の図書館にあるので、見に行ってください」  
など、『みちしるべ』の執筆者にかわって、調べ、助言  
をする姿を、また、執筆者がごく頼りにしているのを  
この目で見てきた。ふだんの姿は、おっとりとしてい  
て、ドンと構えていて、「何かホツとする存在」とはあ  
る郷土史会幹事の言葉である。

郷土史会以外でも、ご講演や執筆活動をされていた。  
しかし、私にとって一番の思い出は自宅にお邪魔して、  
台所のテーブルで『みちしるべ』の原稿を広げて、その  
内容を何時間にも亘って相談したことだ。そして、歴史  
散歩で、羽間さんの横でお話を聞いたことだろうか。も  
う少し、お側でお話を聞かせていただきたかった。

この場を借りて偉大な先達である御二方のご冥福をお  
祈りしたいと思う。

合掌